

「内視鏡外科用語集」

日本内視鏡外科学会用語委員会 編集

北里大学名誉教授

比 企 能 樹

この度「内視鏡外科用語集」が完成した。

内視鏡外科は、セム教授、ムレー教授により婦人科・外科領域で1980年の後半に行われたのが事始めであるから、現在までその歴史は、ようやく10年そこそこが経過したところである。この新しい手法はあっという間に世界的な規模で広く普及を遂げた。それはわれわれ古い世代に育った外科医にとって予想をはるかに上回る速度であった。

その理由の第一は、従来法による手術に比べて、この新機軸の内視鏡外科は視野が誠に良いことである。直視下に従来の手術を進める際にも手術野を凝視するのだが、通常見えてこないはずの視野が、この手法によると実によく展開する。局所解剖学が、誠によく見えるのである。

次に考えられるのは、この外科にかかわる人々へのメリットであろう。つまり、手術を受ける患者側にとって手術侵襲の減少など負担が少なくなったこと、術者にとってはよく見える手術ができること、被教育期間の医師にとって机上の解剖学がそっくり目の前に展開されたところで手術法を理解できることなどである。

ところで、このように発展する内視鏡外科のこれからの課題は、これほどしっかりと観察できる手術野を

正確にかつ普遍的に記録することであろう。ひいては、それがこれからの世代の医療従事者にとって最も必要なことであり、正確な情報開示が求められる現代においては、医療の基本として課せられた使命と言える。

すなわち内視鏡外科に携わる者の責務は、すべからず正確な知識をもってこれに当たり、そのうえ正確な記述を、正確な言葉をもって書き残さなければならない、という点に凝縮される。そこで内視鏡外科用語の正しい解釈と使い方が必要不可欠となってくる。今回世に出た「内視鏡外科用語集」こそ、内視鏡外科医にとっての待望の書となるゆえんである。

中を開いて感心したことが3つある。

第一に、扱う用語の範囲が実に広範にわたっていること。第二に、この書の企画から完成までが実に迅速で、医学の速い時代の流れに対応できたこと。第三には、これほど多数の用語の検索が和文でも欧文でも、即座にできるようになっていることである。

それらを更に分析すると、第一の点では、この本を使用する科は実に多く、消化器外科、胸部外科、産婦人科、泌尿器科、整形外科、そして麻酔科、形成外科、乳腺外科、甲状

腺外科、心臓血管外科と多岐にわたっている。この多専門領域の人々にとって共通な言葉で記述し、お互いに理解をはかることができる書となっていることに驚嘆する。その広い分野で使われる用語が実によく調べられ、そのうえ既に世に出ている各学会による用語集や、診断・治療で用いられている取扱い規約とも疎漏なく照合されている点が、すばらしい。

第二の点の本の完成までの迅速さは、この日本内視鏡外科学会用語委員会のメンバーを見ると納得できる。いずれも若さとその精力的な仕事売りの学者たちによって構成され、想像したとおりのでき具合に脱帽である。

第三の使いやすさの点は、左頁に手術手技・器具・所見・診断・解剖の分野のスタンダードな用語を載せ、右頁にそれらの用語の使い方や類語を註の形で載せるなど、索引の正確さとも相まって、みごとな企画となった。

委員各位の努力と、出版元の編集委員との息がぴったり合った傑出した書と言えるのではなからうか。

● B6 頁256 図1 表3 1999
定価(本体3,500円+税) 円400